

A Study of Joseph Conrad On 'The Planter of Malata'

植 木 利 彦

(昭和52年9月16日受理)

I

「マラタの農園主」('The Planter of Malata', 1914) はコンラッドが『勝利』(*Victory*, 1915) の執筆を中断した期間に書かれた作品である。従って「マラタの農園主」は『勝利』に非常に類似した作品であるといわれている。しかしながら必ずしもそうとは断言できないところが随分とあるようである。むしろ『勝利』の舞台設定と「生」に信頼をなくしたヘイスト (Heyst) の死に方を利用しながら、「闇の奥」('Heart of Darkness', 1819) と「七島のフレヤー」('Freya of the Seven Isles', 1912), そして後に出版した『黄金の矢』(*The Arrow of Gold*, 1919) の一部分を借りてきてミックスしたような作品であると考えられる。前述した作品との類似点を探りながら「マラタの農園主」を分析してみたい。

II

小説は大きな植民地の町 (a great colonial city) の人々や色々な出来事を飯の種にしている新聞社の編集長と人間社会から遊離し、一人孤島に住むジェオフェリー・レナード (Geoffrey Renouard) という実に対照的な人物間の会話で始まる。我々は彼等の会話から主人公レナードはヘイストと同じように学校を出るとすぐ放浪の旅に出て、あちこちを転々としたあげく、この地において編集長の援助により五年間に及ぶ奮闘的な冒険並びに探険を行かない、その結果、現在ではマラタ島の利権を手に入れ植物絹 (vegetable silk) 園を一人で経営していることを知る。レナードが西洋社会を離れ辺鄙なこの地に流れてきた過程はヘイストのそれと酷似するものであり、彼等が共に煩わしい人間社会を嫌悪していること、更にマラタ島がサンプュラン (Samburan) 島を連想させるということは否定できない。しかしこの二人の間には大きな相違点がある。それは彼等の性格である。ヘイストは東洋を彷徨い歩いたが、それは何かに執着することを嫌い、ただ色々な出来事、事物を客観的な目で眺めるだけであって、あらゆることに対して傍観者であり、哲学者であった父親からの強い精神的影響を受けて行動的な性格が影を潜めている男である。だがヘイストは非常に思索的、観念的であり、ある意味では禁欲的でもあり、他人に対する思遣りのある人間であった。一方レナードは他人との煩しい関係を嫌って孤独を守っているが、

根は目的遂行のためには辛苦をものともせず、彼自身並びに他人の生命も将来も考えずに猪突猛進する行動的な人間である。彼のこのヘイントには見出せないバイタリティーが他の者になしえなかった成功を彼にもたらしているのであるが、このがむしゃらな情熱に駆られ、手段を選ばぬ思慮に欠けた性格はアフリカの真只中であって自己を制しきれずに本能に駆られるまま自己破滅という奈落の底に落ちていったクルツ (Kurtz) を想起させずにはおかない。このことからレナードは一見ヘイストに似ているようであるが、性格的にはむしろクルツに近い人間であるといえるだろう。だがレナードとヘイストに共通していえることは彼等のその性格がそして生き方が彼等の運命の破滅の原因となっていることである。この情熱に駆られ盲目的な行動に走るレナードでも編集長がいうように人間社会の中に留まっていれば少なくとももう少し自制心を養い、人間を見る眼もできたことであろう。編集長は彼の異常な生き方に対して “Solitude works like a sort of poison ...”¹⁾ と述べている。正にそのとうりであり、マラタ島での孤独な生活はものを見る彼の眼にその影響を及ぼしている。 “... I don't know how it is that, when I come to town, the appearance of the people in the street strike me with such force. They seem so awfully expressive.” (I. 4) というレナードの言葉は取るに足らないありきたりなものを非常に強烈な映像として捕えていることの証明であり、いわばカメラの絞りを絞って明暗を鮮明にした画像のようである。ということは彼の眼は存在するものをありのままに見ているのではなく、ある特殊なフィルターを通してものを見ているようなものである。このような異常な視覚を持つ彼の目の前にロンドン社交界の花形である美しいフェリシア・ムアサム (Felicia Moorsom) が現われた時、レナードが彼女に強く魅せられたのも無理からぬことと思われる。彼女のその美しい官能的な姿と歩きぶりは「七島のフレイヤー」のフレイヤーを想起させるものであるが、彼女はフレイヤーのように愛に生きる人間ではなく、観念と虚栄心に生きているのである。すなわち、彼女は男性の視覚と感情を強烈に刺激する美貌と肉体を持ちながら、視覚的、感情的な世界を拒絶しているのである。レナードが彼女から受ける視覚的な印象はこの肉体と精神のアンバランスを象徴するようなものであることを物語っている。

The light from an open window fell across her path, and suddenly all that mass of arranged hair appeared incandescent, chiselled and fluid, with the daring suggestion of a helmet of burnished copper and the flowing lines of molten metal. (I. 9-10)

The expression of the eyes was lost in a shadowy mysterious play of jet and silver, stirring under the coppery gold of the hair as though she had been a being made of ivory and precious metals changed into living tissue. (I. 10)

1) Joseph Conrad, 'The Planter of Malata' in *The Shadow Line and Within the Tides*. (London: J.M. Dent and Sons Ltd, 1969) p. 5. 以後ページ数のみを示すものはこの作品による。

このような金属や象牙等によって描写されているフェリシアはリタ (Lita) と同じく彫像的なイメージを我々に与え、彼女も又非人間的な社会に生きる不毛のヴィーナス (Venus) であると考えられる。このことからフェリシアはプレイヤーの美しい美貌と肉体、そしてリタの人を愛せない彫像的な不毛さの両方を具備している人間といえる。フェリシアの非人間的な社会とは一般大衆と遊離したロンドンの社交界をさしている。ムアサム教授によればこうした社会にも、一般社会と同じように、思想とか感情とか行動とか意見といったものもあるが、なにぶん生活しなければならないとか、食べていかなければならないといった実生活を意識することがないのだから、このような社交界でおこなわれるすべてのものは生を享樂するだけのもので、ゲームと同じく人を興奮させたり疲労させたりするが、とどのつまりは何の意味もなく、どうにもならない一種の高等な放蕩にすぎないのである。つまり上流社会にあってはこれらはゲームに必要なルールと変わるところがないのであり、好む好まざるにかかわらずその社会に留まるためにも、又その社会の中での自己主張の手段としてある事柄に関して思想や感情の表明が必要であり、それに伴う行動が起されなくてはならないのである。フェリシアも長い社交界での生活のため、その社会での形式、観念といったものが彼女の第二の天性となっているのである。彼女にとって最も大切なことは自由な感情に従って生きることでもなく、信義でも愛情でもなく、彼女の属する社会の人々の眼に彼女がどのように映るか？あるいはどのように評価されるか？なのである。では何故古い人間的な感情や欲望などこの文明化された世に存在しないと思っている彼女が行方不明の許婚であるアーサー (Arthur) をこんなへんぴな所まで探しに来たのだろうか？父親である教授は彼女の動機について (And) "I ask myself if she is obeying the uneasiness of an instinct seeking its satisfaction, or is it a revulsion of feeling, or is she merely deceiving her own heart by this dangerous trifling with romantic images. And everything is possible—except sincerity, such as only stark, struggling humanity can know. (I. 41) と述べている。少くとも彼女がアーサーを心の底から愛していることに起因した行動ではない。彼女がアーサーを探し出して結婚しようとするのは彼女が彼の不正を信じたことへの社会的償いであり、その証拠を社交界に見せたいためである。従って彼女にはアーサーを信じなかった自己の思慮の残さに対する反省だとか、一人の人間を駄目にしてしまったことに対する罪の意識などは全然感じていない。彼女のこの表面的な責任感の裏には驚くほどの虚栄心がある。このように純粋に人間的な感情や欲望のつけ入る隙のない洗練された社会に住む愛のないフェリシアと太古の人間を思わせるような自己の欲望や感情を抑制出来ないレナードとの出会いは正に奇異なことであると同時に悲劇的なものになることは予想しえる。フェリシアを知った瞬間からレナードは、編集長がいうような行動的な人物として我々の眼に映るのではなく、彼女を愛するにつれてむしろ次第にその生気を失ない、不眠に悩まされ、彼女の視覚的な魅力によって夢遊病者のように彼女のもとに引寄せられている。このあたりのレナードは

ムッシュ・ジョルジュ (Monsieur George) と同じく女性の容姿に強く魅せられ、相手の女性を正しく理解しているのではなく、その女性のかもし出す雰囲気には幻惑されているのである。このような精神状態にあるレナードを描写するにあたってコンラッドは “dream”, “nightmare” という単語を多用しているものであり、他にも “fantasy”, “hallucination” 等の言葉を効果的に使用しているのである。レナードは、砂漠で喉を涸した男がオアシスの蜃気楼に幻惑されて突進むように、フェリシアという空虚な冷たい蜃気楼を生の限界を超えた世界まで追っていくのである。この “nightmarish” な世界は小説全体を覆う薄暗い感じによって更に強調されているといえる。レナードがフェリシアに会うのは大体において薄暗がりの中であり、フェリシアはあたかも立込める霧のむこうから現われるように彼の前に姿を現わす。このイメージは人のわけ入らぬ未開の土地に侵入し、冒険、探検を繰返してきたレナードが今また未知な女性を知ろうと努力する冒険のように思われる。しかし悲しいことにフェリシアの前にいるレナードにはかつてのようなバイタリティーはなく、正に道に迷って無為に体力を消耗していく遭難者のようである。又、小説の薄暗い印象はレナードの心の中の苦悩と、フェリシアにアーサーの死を隠している事実を暗喩しているものと考えられる。従っていつかこの薄暗がりの未知の世界を抜けきった時、すべてのものが白日に晒される運命にある。この迷いながら進んできた迷路の入組んだ様を白日のもとに晒すのがマラタ島である。ヨットから見える夜のマラタ島はその瞬間を、そしてレナードの運命を暗示するかのようには描写されている。

The blackness of the island blotted out the stars with its vague mass like a low thundercloud brooding over the waters and ready to burst into flame and crashes. (I. 59)

白日に晒されたマラタ島でのレナードとフェリシアの対決は最も古い熱い感情に支配された人間と観念そして形式によって武装された人間との対決である。レナードの火のように激しい言葉も彼女の心を動かさず、衝動的な抱擁も彼女の冷淡な態度と言葉に出合うだけである。レナードにとって “Divinity” であり “the eternal love itself” であり, “the inexhaustible joy” であるフェリシアは実は泥で造った人形に虚栄心、観念、形式といった絵具で色彩をほどこしたような人物にすぎないのである。彼女の無口さと厳かな態度はこの彼女の精神的空虚さを隠す仮面なのである。我々は彼女の精神的空虚さと彼女から愛をうることの不可能さをレナードの夢の中に見出すことが出来るのである。

The sickly white light of dawn showed him the head of a statue. Its marble hair was done in the bold lines of a helmet, on its lips the chisel had left a faint smile, and it resembled Miss Moorsom. While he was staring at it fixedly, the head began to grow light in his fingers, to diminish and crumble to pieces, and at last turned into a handful of dust, which was blown away by a puff of wind ... (I. 31)

フェリシアを相手にして初めてレナードは彼の意をままたらぬことが存在することを知ったのである。これはレナードにとって驚くべき真実の認識であると共に未知なるものに挑んで敗北を知らなかったレナードの敗北である。未知なものに挑んでその辛苦に耐えられず敗北していった者は、レナードの眼から見れば、精神的に弱かったためであり、そのような者は亡びる運命にあってしかるべきであると考える以上、フェリシアに敗れた彼も亡びる運命にあって当然なのである。フェリシアの幻を追って生の限界を越えて泳いでいくレナードの敗北は飽くことを知らぬ冒険心のなせる技であり、現実の人間社会に解け込もうとしなかった自らの性格による手痛い竹篋返しであったといえる。

III

この作品はコンラッドの作品において度々描かれてきた愛に対する彼の否定的な考え方を基調にし、フェリシアという女性に神によって与えられた大古から変わることのない肉体の美しさの中に宿る文明社会によって形成され培われてきた観念や倫理観そして社会慣習といったものによって生来の本能や感情を完全に支配されている人間と、観念や倫理観そして社会慣習等には余り縁のないむしろ非文明社会に住む人間のように感情や本能といったものに支配されている人間を描いているのであるが、コンラッドがしばしば物語るように実生活に足をつけず、人間の中に宿る生来の原始性と後天的な文明性の適度の調和を欠くものは常に滅びる運命に定められているのである。我々はそうした例をクルツやヘイストに見出すのである。しかしクルツ、ヘイストとレナード並びにフェリシアを比較してみると、レナードはクルツのように人間の本性に宿る醜い原始性に魅了され、自己の精神的空虚さに悲痛な叫び声をあげているのではなく、常に視覚的印象によって惑わされかなわぬ恋から生ずる精神的苦悩を味わっているにすぎない。一方、フェリシアも高慢な虚栄心と虚飾に満ちた観念や倫理観等によって人間の本能、感情といったものを文明性の底に埋没させているのであるが、彼女には真の意味での教養や思索癖、あるいは信念といったものはない。ヘイストはリーナ（Lina）との関係において人を愛することの大切さを理解したが、フェリシアやレナードには人の心を理解する能力すらない。彼等は共に自己を含めて人間を理解する能力を欠き、余りにも単純すぎ、人間的には調和を欠いている。彼等はクルツやヘイストと比べると性格的に余りにも片寄りすぎており、その行動も真実味に乏しく、やはり二流の人物でしかありえない。

RÉSUMÉ

A Study of Joseph Conrad
On 'The Planter of Malata'

Toshihiko UEKI

Some critics say that 'The Planter of Malata' remarkably resembles *Victory*. But I consider It also has something in common with *Chance* and 'Freya of the Seven Isles.' So I want to search the resemblance among them and analyze 'The Planter of Malata.'